

中間言語の化石化と第二言語習得のメカニズム

森山 新*

キーワード: 化石化, 第二言語習得, 中間言語, スキーマ

要旨

本研究は第二言語習得過程に見られる中間言語の化石化現象を分析することを通じて、第二言語習得のメカニズムを明らかにしようとしたものである。研究は韓国語母語話者の日本語学習者を被験者として、共起する格助詞に化石化が起りやすい、可能動詞、「上手・下手」、「好き・嫌い」、動詞のタイ形に共起する格助詞を縦断的に調査して行った。

その結果、可能動詞や動詞タイ形では、ヲ格共起が長引き、化石化が起きやすいのに対して、「上手・下手」、「好き・嫌い」では化石化が起りにくく、比較的容易にヲ格共起はガ格共起へ移行した。

化石化を引き起こす原因としては、認知的な要因が考えられる。認知的な要因とは第一言語と第二言語の認知的なスキーマの違いであるが、とりわけ他動的スキーマと自動的スキーマの違いは第二言語習得にあたってスキーマの転換を難しくし、習得を遅らせている。スキーマの転換には第一言語と第二言語との間に類似性を見いだすことが役に立つものと推察される。

1. はじめに

中間言語 (interlanguage) という用語を最初に用いたのは Selinker (1969, 1972) である。こうした考え方が生まれたのには、その当時、学習者言語の誤りに対する見つけ方が根本的に変化していたことが背景となっている。

すなわち 1960 年代までは、誤りとは習得の失敗であり避けるべきもの、というように否定的にとらえられることが多かったが、Corder (1967) は第一言語習得との比較の中で、誤りとは学習者が目標言語に対し、自ら立てた仮説に対する検証の結果であり、学習のために用いられる方略であるとし、さらに学習者言語には目標言語とは異なるものの、体系的性が備わっていると見、学習者言語を肯定的にとらえる視点を提示した。このように誤りを肯定的に見つけ、学習者

* MORIYAMA Shin: 世宗大学校日語日文学科専任講師。

言語を不完全ながらも体系性を持った1つの言語としてとらえる視点が、Selinkerをして中間言語という考え方を生み出させたのである。

今日、第二言語習得過程に見られる中間言語の一般的特徴として、体系性、浸透性、遷移性、普遍性、変異性、化石化などが挙げられている¹。このうち化石化 (fossilization) は Selinker (1972) の当初から指摘されていた中間言語の特徴であり、学習者言語の一部が不完全なまま発達を止めてしまう現象をさす²。彼の中間言語という用語自体、「発達が途中で止まってしまった言語」という意味が込められている。

本稿では韓国語母語話者の日本語習得過程に見られる中間言語のうち、特に化石化という問題に焦点を当て、化石化が生じる過程を明らかにすることを通して、第二言語習得のメカニズムの解明を試みるのが目的となっている。

具体的には以下に示すように韓国の大学生を対象に、動詞の習得を中心とした縦断的調査を実施し、動詞などの用言に共起する格助詞の習得過程に見られる化石化を分析していく³。本稿で扱われているのは、母語である韓国語の転移を受けやすい、可能動詞⁴、「上手・下手」、「好き・嫌い」、動詞のタイ形に共起する格助詞ガの習得についてである。

2. 先行研究

本稿の直接の先行研究となっているのは森山 (1999, 2000) である。そこでは韓国語母語話者の日本語習得過程における ① 動詞ル形・マス形の習得、② マセン・マセンデシタの変異形としてのナイデス・ナイデシタの表出、③ 意志形における助動詞ヨウの欠如、④ 動詞と共起する格助詞という4つの中間言語を例にとりながら、中間言語体系がどのように形成されるかを調べている。特に①を除く②～④では中間言語の化石化現象が取り扱われ、そのメカニズムが認知との関連から分析されている。

まずマセン・マセンデシタの変異形としてのナイデス・ナイデシタの表出とその化石化では、認知的な明瞭性、母語の転移、言語の一般的傾向に反する日本語自体の問題、過般化などがその原

¹ 詳しくは山岡 (1997: 75-76) を参照のこと。

² 化石化 (fossilization) という用語を初めて用いた Selinker は、現在この用語の代わりに stabilization という用語を用いているようである。

³ 本稿では大学1, 2年生が被験者となっている。化石化は中間言語がその発達途上で発達を完全に止めてしまう現象をさすものであり、大学1, 2年生で見られる中間言語の停滞が化石化であるのか、単に一次的な停滞であるのかは、その後の発達過程を見なければわからない。したがって本稿では、中間言語のスムーズな発達が停滞したり、逆戻り現象を示したりするものをさして化石化と呼ぶことにする。

⁴ 本稿では可能の意味を持つ動詞、すなわち5段動詞語幹 + eru, 1段動詞語幹 + (ra)reru, 「できる」、「わかる」、「来(ら)れる」などを総称して可能動詞と呼ぶことにする。

因となっているとした。

意志形における助動詞ヨウの欠如やその化石化においては、母語の転移と、現在・未来時制のゼロ標識化という言語の一般的傾向が作用していた。そして未来時制が現在時制と1つに結びつけられゼロ標識化しやすいことには、認知的要因が作用しているとした。

最後の動詞と共起する格助詞については、動詞に共起する格助詞において共通性が高い日韓両語の中であって、格助詞の使用が異なる動詞「なる」、「会う」、「乗る」を調査対象とし、それらに共起する格助詞の使用について研究がなされている。その結果、この3つでは母語(韓国語)の転移を大いに受け、習得は化石化したり、逆戻りの様相を呈したりしていることが明らかになり、この原因を言語の背後に存在する認知領域において、第一言語(韓国語)運用時のイメージ・スキーマが第二言語(日本語)運用時にもそのまま用いられていることが原因であるとした。

3. 動詞などに共起する格助詞の日韓対照分析

本稿では「なる」、「会う」、「乗る」などと共に日韓両語において格助詞の使用が異なる可能動詞、「上手・下手」、「好き・嫌い」動詞のタイ形の4つについて、これらに共起する格助詞の表出の推移を縦断的に調査する。ここではまず、これらと対応する韓国語との間に、格助詞の使用に関してどのような差が見られるかを簡略に説明する。

3-1. 可能動詞

日本語の場合、可能動詞を用いて可能・能力の意味を表す場合には、動作対象を主語とする状態として表現され、(1)(2)のように動作対象にはヲ格を用いず、ガ格にすることが多い。一方、韓国語では(3)(4)のように動作対象はそのまま動作の対象としてヲ格(을/를)が用いられる。これは日本語での(5)(6)の表現と似ている。

- (1) 私は日本語の新聞が読めます。
- (2) 私はさしみが食べられません。
- (3) 나는 日本語 新聞을 읽을 줄 압니다.
(私は日本語の新聞を読むことができます。)
- (4) 나는 회를 먹을 수 없습니다.
(私はさしみを食べるできません。)
- (5) 私は日本語の新聞を読むことができます。
- (6) 私はさしみを食べるできません。

すなわち日本語の(1)(2)のような場合には、新たに動作対象を焦点化して主語に定め、状態動詞としての可能動詞で可能・不可能を表現するのに対し、(3)(4)のような韓国語や(5)(6)の

ような日本語では、動作主と動作、及び動作対象の関係はそのままに保ち(その結果動作対象はそのままヲ格が用いられる)、その場面全体を焦点化して主語とし、それが可能・不可能であると表現しているのである。

3-2. 上手・下手

日本語の「上手・下手」は可能動詞同様、能力を表し、動作の主体ではなく、動作対象を主語とする状態として表現され、(7)のように動作対象を表すのにガ格が用いられる。「上手・下手」に相当する韓国語は動詞「하다(する)」を用いた「잘 하다・잘 못하다」、または形容詞を用いた「능숙하다・서투르다」の2つがある。このうち前者は(8)のようにヲ格(을/를)を要求するが、後者は(9)のようにガ格(이/가)を要求する。その結果韓国語母語話者の中間言語においては、(10)のようにヲ格が共起する可能性がある。

- (7) 彼女は日本語が上手/下手です。
 (8) 그녀는 일본어를 잘 합니다/잘 못합니다.
 (彼女は日本語を⁵上手/下手です。)
 (9) 그녀는 일본어가 능숙합니다/서투릅니다.
 (彼女は日本語が上手です/下手です。)
 (10) *彼女は日本語を上手です/下手です。

3-3. 好き・嫌い

日本語の「好き・嫌い」は、好き嫌いを感じる主体ではなく、好き嫌いの対象に焦点が当てられ主語となり、それが(11)のようにガ格で表されることが多い。一方「好き・嫌い」に相当する韓国語の「좋아하다・싫어하다」では、(12)のように好き嫌いを感じる人間主体がそのまま主語となり、好き嫌いの対象はヲ格(을/를)で示される。そのため(13)のような中間言語が表出されることが多い。但し形容詞「좋다・싫다」を用いる場合には、(14)のように好き嫌いの対象が主語となり、ガ格(이/가)で表される。

- (11) 私は魚が好き/嫌いです。
 (12) 나는 생선을 좋아합니다/싫어합니다.
 (私は魚を好き/嫌いです。)
 (13) ?私は魚を好きです/嫌いです。
 (14) 나는 생선이 좋습니다/싫습니다.
 (私は魚が好きです/嫌いです。)

⁵ 本稿における韓国語の日本語訳文では、韓国語の格表示をそのまま明示するために、日本語として不自然であっても、敢えて「이/가」は「が」、「을/를」は「を」で表記するようにした。

3-4. タ イ

日本語の動詞に助動詞タイが接続すると、(15)のように動作の対象がヲ格からガ格に転換することが多い。但しこれまでの可能動詞、「上手・下手」、「好き・嫌い」などに比べると、(16)のように動作の対象がそのままヲ格で表現されることも少なくない。これに対してタイに相当する韓国語の「~고 싶다」は、動作の対象を(17)のようにそのままヲ格(을/를)で表す⁶。そのため韓国語母語話者の日本語の中間言語では、(18)のようにタイ形の動詞の動作対象にヲ格が共起することが多くなる。

- (15) 私はピザが食べたい。
 (16) 私は日本語を習いたい。
 (17) 나는 피자를 먹고 싶다.
 (私はピザを食べたい。)
 (18) 私はピザを食べたい。

4. 調査の方法

このように日韓両国語において共起する格助詞が異なっている可能動詞、「上手・下手」、「好き・嫌い」、動詞のタイ形について、中間言語発達がどのようになされるかを縦断的に調査し、化石化のプロセスと第二言語習得のメカニズムについて明らかにする。

4-1. 調査対象

研究のための調査は森山(1999)で行われたもので、1998年度に実施した。被験者は韓国ソウル市内の日本語日文学科のある A, B, 2つの4年制大学の学生で1年生16名(A, B大学各8名)、2年生20名(A大学8名, B大学12名)である(両大学の被験者の詳細については森山(1999: 105-106)を参照)。

4-2. 調査方法

学生を4人(これを被験者 a, b, c, dとする)ずつのグループに分け、各人に以下のような基本動詞の絵カードの17枚ずつのグループ(I~IV)を1つずつ配り⁷、これを用いて4人に a→

⁶ 韓国語でも親密な口語表現などの際には「나는 피자가 먹고 싶다」というように動作の対象が焦点化してガ格(이/가)が共起し、主語となる場合がある。

⁷ この調査が行われた森山(1999)は、動詞活用形の習得順序を調べるのが主目的となっており、動詞グループの分類は活用の種類(5段動詞, 1段動詞, 例外5段動詞など)を中心として分けられ、格共起の

b → c → d → a → ... というようなローテーションで口頭発話を求める。具体的には自分の発話の順番が回ってくるたびに被験者は17個の動詞を1つずつ順々に使って発話を行う。4人の被験者にそれぞれ異なった絵カードを配ったのは、被験者の発話が相互に影響し合うことを防ぐためである。

I グループ: 起きる 飲む 洗う 磨く 履く 着る 来る 行く 乗る 降りる 帰る
脱ぐ 見る 書く 話す 習う できる

II グループ: 働く 遊ぶ 勤める 住む 走る 立つ 登る 太る 痩せる なる 言う
泣く 捨てる 送る 買う 待つ 死ぬ

III グループ: 食べる 読む 歌う 歩く 着く 出る (勉強)する 置く 撮る 教える
入る 泳ぐ 寝る 聞く 押す 思う あげる

IV グループ: 弾く 飛ぶ 生まれる 休む 切る 打つ 座る 叱る 替める 降る 吸
う 咲く 過ぎる 作る 会う 持つ 呼ぶ

68枚の絵カードにはその動詞を描いた絵と、ヒントとして漢字が1字書かれている⁸。例えば「書く」の絵カードには、「書く」という単語は書かれておらず、そのかわりに「書く」動作を描いた絵と、「背」という漢字が書かれている。なお「できる」、「あげる」、「なる」の3つの動詞については、漢字がヒントとなりにくいと考え、代わりに「can do」、「give」、「become」と英語が記入されている。また「する」には「勉強する」絵が描かれ、ヒントとして「勉強 ____」と書かれている。例えば被験者は「起きる」のカードを見ながら、

私は毎日7時に起きます。

今朝、私は6時に起きようと思いましたが、朝寝坊をしてしまいました。それで遅刻しました。などといった発話を行うことになる。わからない動詞は飛ばして次の動詞を用いてもかまわない。調査は各回30分ずつ行われ、発話された内容はすべて録音した。ただし1年生の調査では、未だ会話力が十分ではないので30分を4等分し、7分30秒ごとに17枚1組の動詞群をローテーションして交換し、30分で各被験者がそれぞれ68枚の動詞全てが回るようにしたが、2年生の場合には、1つの動詞を用いてかなり長い発話が可能となったので、1組の動詞群を用いて30分間発話を行ってもらい、動詞群のローテーションは、各被験者ごとに4回の調査で動詞群4つが一巡するようにした。例えば被験者 a では、第1回目の調査ではグループ I、第2回調査でグループ II、第3回目の調査でグループ III、第4回目の調査でグループ IV というようにローテーションした。録音テープを書き起こして文字化し、データベース化した。

なお、本研究はこうして作成したデータのうち、可能動詞、「上手・下手」、「好き・嫌い」、動

側面からの分類にはなっていないが、ローテーションを行うことで、共起する格のグループ間の偏りは相殺され、データ上大きな問題はないと思われる。

⁸ 絵カードが具体的にどのようなものかについては森山(1999)または森山(2000)の付録を参照のこと。

詞のタイ形が用いられているデータを選び出し、これらに共起する格助詞がどのようになっているかを調べた。

調査を実施したのは1年生の場合、授業で動詞を習得し、発話が始まると思われる1学年時の第2学期(実際に調査を実施したのは1998年10~12月)であり、毎月1回ずつ同様な調査を繰り返した(ただしB大学の2名の学生には12月の3回目の調査が実施できなかった)。2年生の場合は、1998年の1・2学期(5~9月)に実施した。また1年生と2年生の調査間隔が開いているのは、韓国では12月下旬から3月初めまでが冬休みであり、学習の進展がほとんどないためである。

5. 調査の結果

5-1. 共起する格助詞の割合

表1は可能動詞、「上手・下手」、「好き・嫌い」、動詞タイ形、コトガデキルに共起する動作対象を示す格助詞の変化をまとめたものである(但し表1で集計されているのは動作の対象がガ格で示されるべきものに限り、ニ格などそれ以外の格助詞で示されるものは除外してある。また「空を飛ぶ」などの場所を表すヲ格や、「手を切る」など慣用句の一部になっているヲ格は可能動詞や動詞タイ形になってもガ格にならないことが多いので除外した)。

まず可能動詞に正しくガ格が共起している割合は、1年生では23.1%→75.0%→62.5%、2年生の場合は38.5%→58.3%→10.0%→29.4%となっており、正答率は停滞または低下の様相を呈している。1年生の11月、12月と2年生の6月にガ格の共起がヲ格の共起を上回っているが、いずれも定着には至らず、逆戻り現象を示している。特に日本語表出にかなり慣れ、自動化が進んだ状態である2年生の7月や9月の正答率が10.0%、29.4%と非常に低くなっている。

一方コトガデキルに共起する格助詞は、1、2年生共に正しくヲ格で表現されている。唯一2年生の9月の調査で1例、(19)のようにガ格が共起している。

(19) ?このごろ日本人があちこちに見ることができます。

(19)の場合、ガ格とコトガデキルの間に「あちこちに」がはさみこまれており、こうしたことは共起関係を弱化し、「見ることができます」に対する「日本人(を)」の独立性を高め、主格化させることもありうる。その結果こうした発話は日本語母語話者の発話中にも往々にして起こりやすい。したがってこの発話を誤ってガ格が用いられたと言い切れない面がある。そのように考えると、コトガデキルに共起する格助詞は最初からヲ格が現れ、100%(近い)高い正答率は維持されつづけることになる。このことは可能動詞の低い正答率とは対照的である。

「上手・下手」に共起する格助詞は、可能動詞に共起する格助詞にヲ格が目立ち、向上の兆しがあまり見られなかったのとは対照的に、表出が本格的に始まる2年生の5月から正しくガ格が用

表1 可能動詞, 「上手・下手」, 「好き・嫌い」, 動詞タイ形に共起する格助詞の表出数

	1年生				2年生					全体平均	
	10月	11月	12月	合計	5月	6月	7月	9月	合計		
可能動詞	が	3 (23.1)	6 (75.0)	5 (62.5)	14 (48.3)	5 (38.5)	7 (58.3)	1 (10.0)	5 (29.4)	18 (34.6)	32 (39.5)
	を	10 (76.9)	2 (25.0)	3 (37.5)	15 (51.7)	8 (61.5)	5 (41.7)	9 (90.0)	12 (70.6)	34 (65.4)	49 (60.5)
コトガデキル	が	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (100)	1 (6.3)	1 (5.0)
	を	0 (0)	2 (100)	2 (100)	4 (100)	6 (100)	5 (100)	4 (100)	0 (0)	15 (93.7)	19 (95.0)
上手・下手	が	0 (—)	0 (0)	0 (—)	0 (0)	7 (100)	7 (100)	4 (80.0)	6 (100)	24 (95.0)	24 (92.3)
	を	0 (—)	1 (100)	0 (—)	1 (100)	0 (0)	0 (0)	1 (20.0)	0 (0)	1 (5.0)	2 (7.7)
好き・嫌い	が	5 (62.5)	5 (71.4)	4 (100)	14 (73.7)	34 (91.9)	27 (87.1)	22 (78.6)	38 (100)	121 (90.3)	135 (88.2)
	を	3 (37.5)	2 (28.6)	0 (0)	5 (26.3)	3 (8.1)	4 (12.9)	6 (21.4)	0 (0)	13 (9.7)	18 (11.8)
動詞タイ形	が	1 (16.7)	0 (0)	0 (0)	1 (5.3)	6 (25.0)	9 (33.3)	5 (33.3)	11 (39.3)	31 (33.0)	32 (28.3)
	を	5 (83.3)	9 (100)	4 (100)	18 (95.7)	18 (75.0)	18 (66.7)	10 (66.7)	17 (61.7)	63 (67.0)	81 (71.7)

()は比率(%)。

いられ、ヲ格が共起するのはわずか2例(7.7%)に過ぎない。つまり可能動詞で目立った中間言語発達の停滞、逆戻り現象はほとんど見られていない。

「好き・嫌い」に共起する格助詞は、1年生の10~11月にはヲ格が共起する場合もやや見られたが、その後向上の兆しが見られ、1年生の12月以降はヲ格の表出は平均10%以下(138例中13例)に維持されている。つまり可能動詞で目立った中間言語発達の停滞、逆戻り現象はここでもあまり起きていない。

動詞タイ形に共起する格助詞は、1年生の時にはほとんどヲ格が共起しており、ガ格の共起はわずか1例に過ぎない。2年生になるとガ格がやや多くなってはいるものの依然20~30%台にとどまり、表出の60~80%はヲ格が占めている。動詞タイ形にはヲ格の共起を許容するケースが多いため、これらを誤っているとは言えないが、母語話者の場合にはタイ形にヲ格よりはガ格が共起しやすいことを考えれば、ヲ格がガ格をはるかに上回り、その改善に時間を要していることは、スムーズな中間言語発達にブレーキがかかっていると考えられる。

5-2. 化石化のメカニズム

表1においてガ格が共起した割合を比較してみると「上手・下手」や「好き・嫌い」では中間言語の発達あまり停滞せずに習得がスムーズに進み、可能動詞や動詞のタイ形では発達に停滞が見られるが、これはなぜであろうか。またコトガデキルでは最初から誤りがほとんど見られないのはなぜであろうか。

まずコトガデキルで誤りがほとんど見られないことについては、日韓両語が共にヲ格を共起するからであると容易に推測することができる。

これに対し、可能動詞、動詞タイ形、「上手・下手」、「好き・嫌い」では、母語の韓国語ではヲ格が共起されるのに対し、目標言語の日本語では一般にガ格が共起されることが多い(動詞タイ形ではヲ格も共起が可能である)。したがって韓国語母語話者がこれらの日本語を表出するにあたっては、母語においてヲ格を共起させ他動詞的に表現していたものを、ガ格を共起させ、自動詞的に表現するように転換しなければならない。このような転換が容易になされるものは習得がスムーズに行われ、転換が困難なものは習得にブレーキがかかるものと思われる。だとすれば「上手・下手」、「好き・嫌い」はこのような転換が容易で、可能動詞、動詞タイ形は転換が困難ということになるが、それら転換の容易さの違いは何に起因するのであろうか。

ヲ格の共起には、認知において動作の他動性を示す他動的スキーマが何らかの形で関与している。一方、これがガ格の共起へと転換することは、焦点化の変化に伴い動作の他動性が動作対象の状態性へと変化することを意味している。その結果他動的スキーマのかわりに、自動的スキーマが用いられるようになる。本稿では他動的スキーマ及び自動的スキーマを便宜上図1のように表すことにする。他動的スキーマには動作とその主体、及び対象が関与しており、動作は下向きの矢印「↓ V_t 」、動作主はS、動作の対象はOで示されている。他動的スキーマはプロトタイプとして他動的な動作を示すスキーマである。これに対し自動的スキーマは状態や動作とその主体が関与しており、状態・動作は右向きの矢印「→ V_i 」、状態・動作主はSで表現されている。自動的スキーマは状態を示す場合と自動的な動作を表す場合とがありうるが、ここでは状態を示す場合のみを扱う。

可能動詞を用いた日本語の可能表現では、図2のように動作の対象に焦点が当てられ主語となり、動作は可能の意味を内包して状態化し、自動詞文として表現される(太線の枠は焦点が当てられていることを示している)。その結果、動作の対象Oはガ格で示されるようになり、「私は日本語を話す」は「私は日本語が話せる」となる。

一方、韓国語の可能表現では前述のように動作の場面全体(動作とその主体、対象全て)が焦点化して主語となり、その可能・不可能が述べられる。その結果動作の対象Oはそのままヲ格(을/를)で示され、「나는 일본어를 말한다(私は日本語を話す)」は「나는 일본어를 말할 수 있다(私は

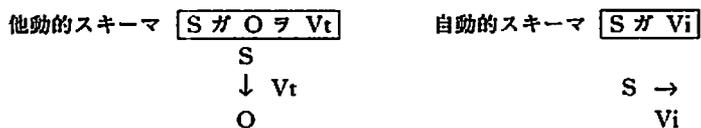


図1 自動的スキーマと他動的スキーマ

日本語の可能表現(SハOガ可能動詞)

韓国語の可能表現(S가O를 ~ㄴ 수 있다)



日本語の可能表現(他動的スキーマ → 可能の自動的スキーマ)

 S ガ O ヲ V_t (他動的スキーマ)

↓ ← 可能

(Sハ) O ガ V_i (可能動詞) (可能の自動的スキーマ)

↓

私は 日本語 が 話せる

韓国語の可能表現(他動的スキーマ → 他動的スキーマ + 可能)と日本語表出のメカニズム

 S ガ O ヲ V_t (他動的スキーマ)

↓ ← 可能

 S ガ O ヲ V_t + 可能 (他動的スキーマ + 可能)

↓

나는 일본어를 말한다 + ㄴ 수 있다

↓

나 는 일본어 를 말하 ㄴ 수 있다

↓ ↓ ↓ ↓ ↓

私 は 日本語 を 話せる

私 は 日本語 を 話すことができる

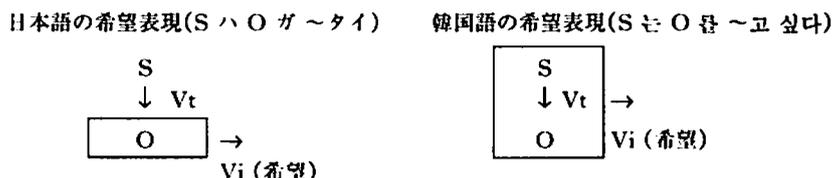
図2 日韓両語の可能表現の認知構造の比較と韓国語から日本語表出のメカニズム

日本語を話すことができる)」となる。これが日本語表出に際してそのまま転移すればヲ格が共起することになり、「私は日本語を話せる」または「私は日本語を話すことができる」となる。

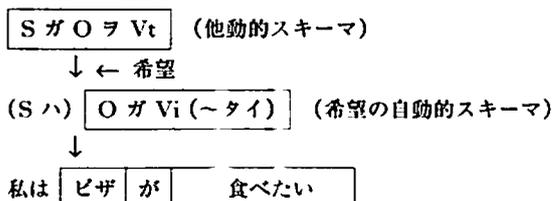
日本語の「上手・下手」を用いた表現も、状態表現として動作の対象はガ格で示される。ところが学習者がこれを「~을 잘 한다・잘 못한다」といったヲ格(을/를)共起の形で記憶した場合、他動的スキーマが用いられ、ヲ格が共起しやすいが、「~이 능숙하다・서투르다」というガ格

(이/가)共起の形で記憶した場合には、可能表現は状態表現化し、自動的スキーマが用いられるようになり、動作の対象にはガ格が共起しやすくなる。実際「上手・下手」にガ格が共起することを記憶するために、「~이 능숙하다・서투르다」というガ格(이/가)共起の形で記憶し、母語との類似性を見いだして記憶に役立てるストラテジーが用いられていることが、被験者の何人かから報告されている。

このように「~가 上手・下手」の場合には、ヲ格共起の「~을 잘 한다・잘 못한다」ではなくガ格共起の「~이 능숙하다・서투르다」といった形で記憶することにより、可能の自動的スキーマへの認知的転換とガ格共起への言語的転換が促進されるようである。しかし「~을 잘 한다・잘 못한다」として記憶した場合には、可能表現は動作の場面全体が焦点化された後、可能・不可能が述べられるスキーマが用いられることになり、ガ格ではなくヲ格を共起させることにつながる。一方可能動詞の場合にはこうした母語との類似性を見出して記憶するストラテ



日本語の希望表現(他動的スキーマ → 希望の自動的スキーマ)



韓国語の希望表現(他動的スキーマ → 希望の他動的スキーマ)と日本語表出のメカニズム

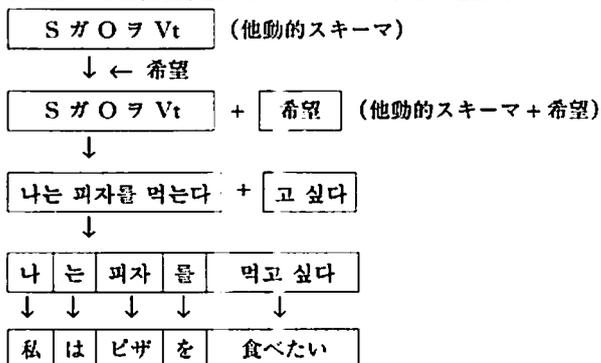


図3 日韓両語の希望表現の認知構造の比較と韓国語から日本語表出のメカニズム

ジーを用いることができないので、韓国語で用いられるスキーマ，すなわち動作の場面全体(動作，及びその主体，対象全て)が焦点化され主語となり，その後可能・不可能が述べられるスキーマが用いられることになり，その結果可能動詞では動作対象にヲ格が共起されやすくなるのである。

次に動詞タイ形(希望表現)について考えてみよう。図3は日本語と韓国語の希望表現の認知構造の違いを比較したものである。日本語の場合は他動的スキーマが用いられて「SハOヲ～タイ」とヲ格を共起させることもあるが，可能表現同様，動作の対象を焦点化して主語となり，自動的スキーマを用いて「(Sハ)Oガ～タイ」とガ格を共起させる場合も多い。

ところが韓国語の場合には，「S가O를～다」はそのままだ動的スキーマが用いられ，ヲ格(을/를)が共起して「S는O를～고 싶다」となる場合がほとんどで，動作の対象が焦点化されて主語となり，ガ格(이/가)が共起した「S는O가～고 싶다」となる場合はまれである。従って韓国語母語話者が日本語を表出するにあたっては，「나는 피자를 먹고 싶다」が「私はピザを食^ウべたい」となり，ヲ格が共起されることになる。

最後に「好き・嫌い」についてであるが，日本語ではやはり対象に焦点が当てられ主語となり，「私は魚が好^ウきだ」とガ格が共起する場合が多い。ところが韓国語では「나는 생선을 좋아한다」というように他動的スキーマが用いられ，対象はヲ格(을/를)で表現される。その結果日本語表出は「私は魚を好^ウきだ」となる。しかし学習者が母語の類似性を見いだして記憶するストラテジーを用いて「～ハ～ガ好き・嫌い」を「～는～이 좋다・싫다」というガ格(이/가)共起の形で記憶したとすれば，対象に焦点が当てられ，状態表現化し，日本語表出にあたっては「私は魚が好^ウきだ」といったようにガ格が共起するようになり，認知において他動的スキーマから自動的スキーマへの転換を促進することになる。

6. ま と め

以上，韓国語母語話者の中間言語においてヲ格が共起しやすい可能動詞，「上手・下手」，「好き・嫌い」，そして動詞のタイ形の中間言語の変化を調査し，ヲ格共起やその化石化のメカニズムについて分析した。

その結果，ヲ格共起は，特に可能動詞や動詞タイ形において長引き，中間言語の発達が停滞したり逆戻りしたりしやすいこと，反面「上手・下手」，「好き・嫌い」などではこうした停滞は起こりにくく比較的容易にガ格共起へと移行することが明らかになった。

その原因は可能動詞や動詞のタイ形においては，他動的スキーマが自動的スキーマへと変換しにくいことが中間言語発達の停滞を引き起こすのに対し，「上手・下手」，「好き・嫌い」などでは，母語と目標言語との間に類似性を見いだして記憶するストラテジーによって，比較的容易に認知

的なスキーマの転換が引き起こされ、これがスムーズな中間言語発達に役立っていることもわかった。

その他の原因として、可能動詞や動詞のタイ形などでは動詞が用いられているのに対し、「上手・下手」、「好き・嫌い」などでは形容詞が用いられており、この違いがスキーマ転換の難易度に影響を与えている可能性も考えられる。つまり動詞(他動詞)の場合は他動性が強く自動的スキーマへの転換が難しいのに対し、形容詞の場合はもともと自動性が強く、自動的スキーマへの転換にさほど困難を要しないと言えるのかもしれない。しかし今回の研究だけでそこまで結論づけることはやや無理があると思われるので今後の研究課題としていきたい。

以上のように中間言語の順調な発達を妨げる原因には、言語の背後に存在する認知的な要因(母語の持つスキーマの転移)が存在すると考えられる。そしてスキーマの転換には母語と目標言語の間に類似性を見いだすこと、具体的には「上手・下手」、「好き・嫌い」において、「～が～上手・下手」をガ格が共起する「～이 능숙하다·서투르다」といった形、「～が好き・嫌い」を同じくガ格が共起する「～이 좋다·싫다」といった形で記憶することがスキーマ転換に役に立った。従って可能動詞や動詞のタイ形においても、他動的スキーマが自動的スキーマへと転換することを、何らかの形で母語(韓国語)との間に類似性を示しながら、理解しやすい形で提示してあげることがスキーマのスムーズな転換を促進することにつながるものと思われる。「나는 일본어가 된다。(私は日本語ができる。)', 「나는 피자가 먹고 싶다。(私はピザが食べたい。)」のようなガ格が共起する自動的スキーマが用いられている可能表現や希望表現の具体例を提示し、母語と目標言語とのスキーマの違いに気づかせることなども1つの方法となるかもしれない。

中間言語には往々にして化石化や逆戻り現象が見られるが、本稿で試みた認知的観点からの説明は、特に化石化や逆戻り現象のメカニズムを説明する上で非常に有効であると思われる。化石化や逆戻り現象は、第二言語習得過程において自動化のプロセスと共に見られる現象である。自動化が進んでいない学習初期においては、学習者は意味をまずは母語で表現し、それを目標言語に置きかえる戦略をとることが多い。これに対し自動化が進んだ後においては意味が直接目標言語に変換される。すなわち自動化以前には目標言語の表出は「母語から目標言語への言語的な変換作業」が中心となるのに対し、自動化以後には目標言語の表出は「認知から言語への直接の変換作業」となる。化石化や逆戻り現象が自動化の進行の中で見られることを考えると、これらに見られる母語からの転移は言語的なものではなく、認知からの転移であると考えられる。言いかえれば母語の認知的スキーマが転移していることが化石化や逆戻りの原因であると言える。本稿で見たように母語と目標言語の類似性を見いだす戦略は、認知的スキーマをスムーズに目標言語のそれへと転換させるうえで助けとなる。

授業中教師は母語と目標言語との違いを言語的に説明し、学習者たちに注意を喚起することが多い。これらの言語的知識は自動化以前に、言語から言語(母語から目標言語)へ変換を行って

る段階では、モニターとして威力を発揮することができるかもしれない。しかしながら自動化が進み、目標言語が認知から直接変換されるようになった場合には言語的知識がモニターとして働きにくく、その結果化石化や逆戻り現象が生じるのであろう。別の言い方をすれば教師が認知的なスキーマを転換する工夫をしてあげない限り、学習者の化石化や逆戻りを解決する道を見いだしてあげることはできないであろう。その意味で本稿で扱った類似性の提示は、記憶のためのストラテジーとしてよりも、認知的なスキーマ転換のためのストラテジーとして有効であると思われる。

参 考 文 献

- 森山 新 (1999) 『認知的観点から見た第二言語習得に関する実験的研究』, 同徳女子大学校大学院日語日文学科日本語教育専攻博士学位論文。
- (2000) 『認知と第二言語習得』, 図書出版啓明。
- 山岡俊比古 (1997) 『第2言語習得研究 (新装改訂版)』, 桐原ユニ。
- Corder, S. P. 1967. The significance of learner's errors. *An Introduction*. Oxford: Basil Blackwell.
- Selinker, L. 1969. Language transfer. *General Linguistics* 9: 67-92.
- 1972. Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching* 10: 209-231.